「教育臨床総合研究15　2016研究」

学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析
― 第六期（平成26年・27年度）の評価票から ―

Exploring the Third-Party Evaluation on the Education Practices of the Faculty of Education at Shimane University : Evaluation on the Practice of 2015 Fiscal Year.

原　広　治*　　畑　智　子**
Hiroji HARA　　Tomoko HATA
河　添　達　也***
Tatsuya KAWASOI

要　旨

本学部の外部評価委員である学部教育活動評価委員に，２年任期の終了年度末に「外部評価票」による質問紙に答える形で外部評価をお願いしている。本稿では，第六期にあたる平成26年度～27年度の評価結果を分析し，今期の成果と次期に向けた課題の抽出を試みた。

〔キーワード〕　外部評価，FD

Ⅰ　学部教育活動評価委員会の活動と役割

山陰両県の学校教員養成を担う学部として平成16年度に改組した島根大学教育学部では，その直後から外部評価に関する組織を設置し，教育改善に努めてきた。その経緯は既行の報告書*ⁱに詳しい。学部の外部評価に関する組織として設立された学部教育活動評価委員会は，その設置要項のなかで，主に以下の業務を行うこととされている。

○学部における教員養成教育の内容，方法，実績等の外部評価に関すること
○学校教育実習事前評価（「面接道場」）に関すること
○その他学部教育活動の外部評価に関すること

これに基づき，⑴山陰両県の教育行政，⑵学校教育，⑶社会教育・青少年教育・スポーツ，⑷芸術文化・NPO，⑸企業・報道関係，という５分野から選出された有識者による委員会が組織された。任期は２年で，平成25年末までの委員合計数は述べ83名である。

第六期にあたる平成26年・27年度については，上記と異なる学部教育活動評価委員会を設置・運用することになった。というのも，平成26年度には，鳥取・島根両県教委との協働のもとに「山陰教師教育コンソーシアム」が構想されており，本コンソーシアムのなかで新たに「学部

*元教育学部附属FD戦略センター兼任教員（授業改善・外部評価部門）
**教育学部附属FD戦略センター特任助教（教育情報システム管理・分析部門）
***元教育学部附属FD戦略センターセンター長

教育活動評価委員会」が組織化されていたからである。「山陰教師教育コンソーシアム」は，教育委員会と大学等との協議・調整のための体制として中教審において提案された「教員養成協議会」に相当する組織であり，平成28年度に島根大学教育学研究科に新設する「教職大学院」設置に関連して構想されていた。しかし，教職大学院の設置申請との兼ね合いで，「山陰教師教育コンソーシアム」の立ち上げが平成27年12月にずれ込んだため，学部教育活動評価委員会を第六期の初年度から始動することができなかった。そこで今期は，元来，学校教育実習の事前指導として設定されていた「面接道場」を学校教育実習の事後に移動開催し，同日に外部評価委員会を開催して教育学部の諸活動について協議を行った。その際，質問紙の形態で「外部評価票」を参画いただいた学部教育活動評価委員の方々に配布し，後日提出していただいた。このような経緯を経て，第六期の学部教育活動評価委員は学校教育および報道・芸術文化NPO関係の16名に委託し，「外部評価票」は，そのうちの14名から回答を得た。以下は，その「外部評価票」への記述をまとめ，項目ごとに考察を行ったものである。

Ⅱ　島根大学教育学部・学部教育活動評価委員による外部評価結果（平成26年・27年度）

【項目Ⅰ：本学部の地域　社会における存在意義，貢献度について】
設問Ⅰ－１「教員養成特化型学部」である本学部の「存在意義」あるいは「貢献度」について，みなさま，あるいはみなさまの周囲では，どのように認知されているとお考えでしょうか。率直なご意見をお聞かせください。

【結果と考察】

回答は「存在意義」「貢献度」「認知度」の概ね３つの観点から分類でき，課題の提示を含めながらもすべての委員からプラスの評価をいただいた。

学外から見た学部像としては，地域づくりは人づくりであり，とりわけ次代を担う子どもたちを育てる教育の役割は重要であることから，島根大学に教員養成特化型学部があり，1000時間体験学修などを通して，地域や地域の学校を知ろうとする学生が山陰の教育を担ってくれることは大変意義深いというものであった。また，卒業生を受け入れる側である学校管理職経験を有する委員からは，毎年優秀な教員を養成し，現場に送り出していることが有り難いという意見を複数いただいた。

「存在意義」・「貢献度」

すべての委員から「存在意義」と「貢献度」に関してプラスの評価をいただいた。それらの意見は，次の３つに大別できた。

① 「山陰地域における教員養成の中心的役割を担い，両県教育の推進と発展に大きく貢献している」や「教員養成においてなくてはならない存在である」といった学部自体に関するもの

② 地域の学校教育・社会教育機関等で行う「1000時間体験学修」や「セメスター制による学習支援等の経験」が卒業後に活かされるといった教員養成に関するもの

③ 教員免許状更新講習や教育センターにおける研修講座，各種研究会・研修会，大学院派

遣研修等といった本学部と学校現場の結びつきから生じる現職教員の研修に関するもの

これらの内容は，本学部の存在意義とその裏返しである貢献の現状をまとめて示していると考えられる。特に②の内容は，本学部教育活動の特徴であるだけに，高評価を得ていることは意義深い。学部授業での学びを学校・社会教育等の生の現場での経験を踏まえて練り直し，さらに学部授業に持ち帰り考えを深めていくといった学びの往還は，学生にとっても，受け入れる機関にとっても，双方に有益な状況をもたらしているといえよう。

また，これらの存在意義と貢献度に示した内容は，そのまま，今後の学部教育のあるべき姿として期待する記述でもあると推察された。

「認知度」

存在意義や貢献に係る「認知度」の高さを示す意見のなかにあって，学部の存在意義は十分にあるとした上で，身近な国立大学の教員養成学部としての認知度はあるが，「特化型」については一般的にはわかりにくく，そう広くは知られていないという意見をいただいた。しかしそれは，教員養成特化型学部は教員志望の特定多数にきちんと認識されればいいことであり，「特化型」が認知されていることがさほど重要ではなく，いい学生を育てていくことと地域の教育に資する研究をしていただくことが一番である，という肯定的指摘と受け取ることができる意見であった。

「教員養成特化型」の意味や現状等について，教育関係者に対してはもちろんのこと，それ以外の地域のみなさまにもわかりやすく伝えていくとともに，教師を志望する人たちに対する「教師になるなら島大」という意識高揚のためにも，本学部の研究や教育活動とその成果を，地域に対し，より効率的に発信していく必要があるといえる。

設問Ⅰ－２　地域社会に対し，本学部の存在意義や貢献度を高めていくために，今後，どのような努力，工夫，方策，企画を行っていくべきでしょうか。みなさまの視点から，自由なご意見をお聞かせ下さい。

【結果と考察】

いただいた意見は，いずれも，学生に○○の力をつけさせるべきであるといった指導面の提案ではなく，本学部の現時点での取り組みの弱みを的確に指摘され，新たに取り組むべき方向性を示していただいたものであった。

もっと学校現場や地域との連携・交流を

今回，ご意見をいただいた14名中７名のみなさまから指摘があったのは，地域社会や学校現場との連携・交流をさらに促進すべきというものだった。例えば，「島根や鳥取における地域課題を学生プログラムに活かしていく」，「現職教員との交流の場を計画的にもつ」，「公民館活動の中で，小中学生への学習支援や地域行事への参加といった何か行えるものがあるのではないか」，「現職教員の研修の場は公的には県教委が設けるものであるので，島根大学と県教委の連携が重要になる。教員採用での連携は限度があるが，採用後の連携には限度がないはず」という内容だった。また，芸術・スポーツなど各分野で優れた人材を育てることが「存在意義」を高めることにもつながるとした上で，それ以外の様々な分野でも活躍し，あるいは興味関心

をもつ学生たちが地域社会で活用されていくことで注目度が高まるとともに，その活動をとおして高校生や小中学生に積極的に指導に当たるようになるといった相乗効果も生まれるのではないか，という意見もいただいた。

これらは，学部教員と地域が連携して行うというよりも，学生が現職教員と交流する場を設定したり，学生がより身近な社会教育施設での活動をとおして地域と接する場を設定したりといった，直に地域の人たちと連携して行うことの重要性を指摘するものと受け止めている。

もっと学部のPRを

教育関係者の内外を問わず，地域への情報発信に関する意見が寄せられた。具体的には，「取り組みについての展示発表や映像発表等の機会をつくる」，「県教委主催の小中学校長会や県立学校長会の機会を利用して，取り組みを情報発信する。学校現場（校長）に島大の取り組みを知ってもらうことは，今後ますます大切だと思う」という内容であった。現在も情報発信に努力しているところであるが，地域や学校現場からすればまだまだわからない部分が多い。今後も継続して学生の取り組みを地域に発信し，研究成果を地域に提供していくことについて，学部全体としても，学部構成員の一人一人としても実践していくことが重要であるといえよう。また，「教師をめざすなら島大だ！」というイメージをわかりやすく中高生や地域のみなさまに広めていく策として，島根大学のマスコットキャラクター“ビビット”や，マンガやアニメを活用したゆるい広報戦略があってもおもしろいという提案をいただいた。全学での広報の在り方も含め，その戦略自体を再考する必要性を示唆するものであった。

さらに，まずは教育の大切さやすばらしさを社会に向けて啓発するとともに，教師という職業が将来の国造りに大きく貢献するものであり，その使命の大きさをアピールすることが大切であるという意見をいただいた。次代を担う子どもたちを育てる教育という営みの重要性について，本学部はもちろんのこと，学校現場や地域社会と共に進めていく内容であるだけに，本学部が行っている地域と繋がり共に育つ諸活動の，ますますの充実が求められる。

【項目Ⅱ：1000時間体験学修について】

学生の「教師力」を培う方策として，本学部では「1000時間体験学修」を導入しています。ここでの設問は，その約半数の時間を占めている，学童保育・社会教育・地域イベント・ボランティア活動・学校での学習支援といった教育活動や地域活動への参加についてお伺いします。

設問Ⅱ－１　学生の活動は，受け入れ先から好意的に受け止められているとお考えでしょうか。

１．とてもそう思う　　２．ややそう思う
３．一概には言えない　　４．あまりそう思わない
５．まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図１参照）

14名の委員中，２名の無回答を除いた12名のうちの11名が肯定的に回答している。（２名の

無回答者は体験学修の受け入れ経験がなく，回答できなかった。）残りの１名は「一概にはいえない」だった。

設問Ⅱ－２　このような体験学修を伴う学生教育は，教員養成教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。

１．とてもそう思う　　２．ややそう思う
３．一概には言えない　　４．あまりそう思わない
５．まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図１参照）

14名の委員の全員が，肯定的に回答している。

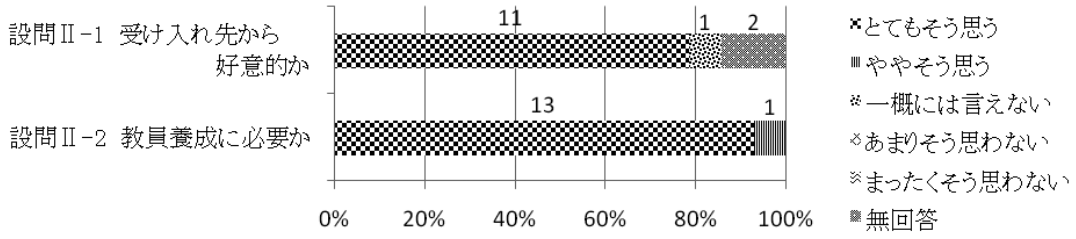

図１　設問Ⅱ－１，設問Ⅱ－２の集計結果

（グラフ中の数値は回答者数を示す。以下，同じ。
設問Ⅱ－１のグラフの数値２は無回答者数である。）

設問Ⅱ－３　このような体験学修をより有意義に深化させるためには，どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【結果と考察】

体験前の意義の理解と，体験後の振り返り

14名中５名の委員から，事前の準備と事後の振り返りの重要性に関するご意見・提言をいただいた。

体験学修前に関しては，学生のニーズと体験先のニーズが合うようにしっかりと話し合うなど，準備の時間が大切であるという主旨のご意見だった。そのことにより，両者が体験学修の意義を再認識，再確認できるとともに，目的意識をもった活動につながりやすくなることは双方にとって有益なことだろう。また，活動前に協議ができることで，体験中のコミュニケーション自体をやりやすくするきっかけにもなるといえよう。

体験学修後に関しては，学んだことを振り返りレポート発表等を行いながら自分の中で整理し，次の活動や教職，自己啓発に生かすような働きかけが必要であるというご指摘だった。体験によって感じたことや学んだこと，見つけた自分の課題等について自己評価をとおして見える化していく作業は現在でも行っているが，その積み重ねにより学びをさらに深化させていく

ことを，より一層工夫しながら推進していくことが求められている。

体験学修のPRも兼ねた体験報告(まとめ)の実施と工夫

上に述べた体験学修後の振り返りや設問Ⅰ－２とも関連するが，４名の委員から，振り返りの成果を各学生の個人的財産にするばかりでなく，報告集にまとめることなどをとおして成果の共有化を図ることや，1000時間体験学修で得た知識やノウハウを学外の人に発表する場を設け，地域のみなさまの考えにもふれながら，さらに自分の考えや方策を再検証していく手段にするという，体験学修の「まとめ」の工夫を求める意見をいただいた。また，学生の発表の機会を地域と密接に関わる公民館活動の一環として位置づけるなど，地域の社会資源と連携し共同した取り組みを提案する意見もあった。これらを実施することは，学生にとっては学びを深め，新たな気づきにつながるほか，地域に向けた学部教育活動の情報発信でもあることから，今後も継続して検討していく内容であろう。

また，地域のみなさまに将来の教師の卵を育てているのだという意識をもっと持ってもらう工夫が必要ではないか，という意見もあった。このことは，学生の学びを深化させるためには地域のみなさまからの力添えが必要であり，そのためのPR活動を充実させていくとともに，人を育てるという教育の営みを地域と共に，双方が考えていくことの必要性や重要性にも言及していると受け止めた。

体験先の施設長や園長・校長との協議の場の設定

また，４名の委員から，学びの深化のためには，体験学修先の施設長や校・園長と学生が意見交換をする機会を設けてはどうかという提案があった。なかには，体験の終了時だけでなく，その中途で行うことで，より効果的であるという意見も寄せられた。確かに，体験の最中に，施設管理運営責任者とディスカッションすることで，新たな気づきを得，考えを深めていくことになるだろうし，体験全体に底流するねらいとしてあるコミュニケーション能力を高めるためにも有効であろう。受け入れ先の負担になることも考えられることから，そのやり方は一様ではなく検討する余地はあるが，今後の活動メニューの一つになればと考える。

体験学修の検証

体験学修で培った教師力が教育現場でどのように役立っているのかを検証することで，さらに深化できるという意見をいただいた。このことは体験学修にとどまらず，本学部教育活動全体をとおして行う教師力育成の視点からも，その根幹をなす重要な指摘である。本学部卒業生の追跡調査をさら充実させ，学部での体験学修と教育実践の関連を明らかにすることで体験学修の改善を図るとともに，現職教員の初期研修の在り方にも一石を投じていきたい。

【項目Ⅲ：面接道場等のキャリア教育について】

キャリア教育の一環として実施する「面接道場」は，教育実習を終え就職が間近となった学生に対しその意識を啓発するとともに，人生のプロである先輩のみなさまから面接をとおしてアドバイスをいただくことによって，新たな世界にチャレンジする意欲をもたせる目的で行っています。

設問Ⅲ－１　このような面接道場は，教員養成教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。また，そのように考えられる理由をお聞かせください。

１．とてもそう思う　　２．ややそう思う
３．一概には言えない　　４．あまりそう思わない
５．まったくそう思わない

【結果】集計結果（下図２参照）

14名の委員のうち，「とてもそう思う」と「ややそう思う」が13名であり，「一概に言えない」が１名という結果だった。

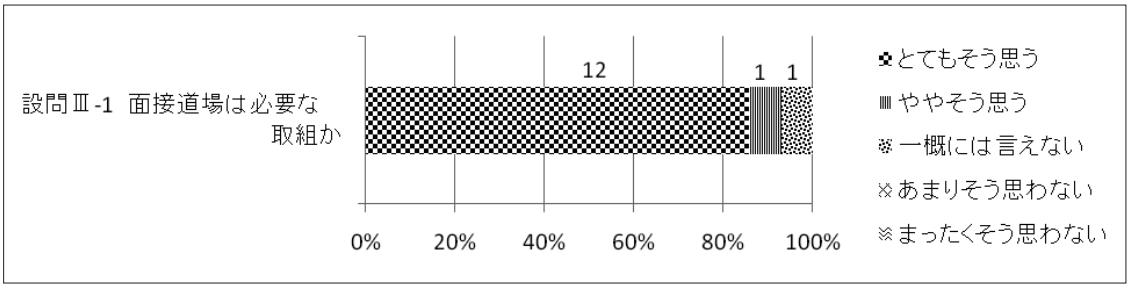

図２　設問Ⅲ－１の集計結果

肯定的評価の理由としては，社会に出るときに必ずある「面接」に向けての意識づけになるといった意見をはじめ，

○教師を目指す者には，子ども理解，保護者や地域との連携，社会情勢への関心等，様々な事項が求められるが，現職教員や教員OBとの率直な意見交換は，学生の視野を広げ，自らを見つめる機会である

○自らの考えを整理したり振り返ったり，教師としての向き・不向きを確認したりして，自信や意欲につながる場である。

○面接をとおして，学生の教師観や職業観がより明確になる

○理論が実践の場でどう生かされるのかを知る（気づく・感じる）機会になる

○残りの大学生活をどんな心構えで送るべきかを考える機会になる

という意見があった。

また，「一概に言えない」を選択された委員の理由は，面接道場等を終えた学生に有意義な体験だったかどうかについて聞いてみることで判断したいというものだった。

設問Ⅲ－２　このような面接道場をより有意義な活動にしていくためには，どのような方策が考えられるでしょうか。また，キャリア教育を進めるためには，面接道場以外にどのような取り組みが考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

【結果と考察】

事前指導は緩やかに

今回の面接道場では，学生に対する質問のポイントを次の２点とし，事前に学生に連絡し，話す内容を準備するよう伝えていた。

①　教育実習や体験学修等の経験をもとに，自分の長所や獲得した力はどのようなものか

②　現時点で，卒業後の進路についてどのように考えているか

これらは質問の項目ではなく，質問の概要・方向性であり，実際の質問は面接者によって自由にアレンジされていたが，このように学生には質問の概要を伝えるにとどめたことについて，委員の意見は好評だった。

さらに，学生は教育ばかりでなく，社会，政治，経済，文化など幅広く興味関心をもち，新聞や本を読む習慣を身に着けることが大切であるので，多方面から質問されることを前提に，あえて質問を事前に教えなくてもいいのではないか，という意見をいただいた。同様に，事前指導をあまりせず，うまくいかなければそこで真剣にその原因を探り，どうしたらいいかを考えるきっかけになるという意見もあった。

事前指導を必要最小限に行い，面接での質問事項を予め伝えず，多様な質問に答えていく面接道場の方向性は，まさに学生自身が「その時」に持てる力を瞬時に発揮し，うまくいかないことをも含めて学びに深化させていくことに繋がると考えられる，重要な指摘である。と同時に，このようなスタイルの面接道場が，そのねらいを達成するためには，学生の日々の学ぶ姿勢が問われ試される面接となるがゆえに，学部教員にとっては「いつも，すでに」の事前指導と面接者と学生とのやりとりをふまえた事後指導（面接道場後のフォロー）をパッケージにした取り組みにしていく必要があると考える。

ディスカッションを取り入れた面接道場を

コミュニケーション能力やリーダーシップ，協調性を見るために，グループディスカッションの場をつくったり，あるいはその議論に面接者自身も参画したりしていくことや，根拠をもって自分の考えを述べる力を育むために，フリートークの時間をもち，その後に相互評価しあう機会をつくっていってはどうか，という提案をいただいた。これらは，上で述べた面接者の質問の自由度を高めることと関連し，面接の場で，面接者自身がそれぞれの持ち味を生かし，学生と自由に議論していくことで，互いに学び合おうとするものでもある。実践するにあたっては，運営上の課題（１グループの人数，面接者の確保，時間の確保等）はあるが，今後検討していきたい。

「生」の現場を知る先輩との関わりを

面接道場以外でキャリア教育を推進する取り組みとしては，（面接道場での協議をふまえて

の）学校現場での実習体験をもっと増やす，教員志望者と現職教員やOB・OGとの意見交換の場を複数回もつ，外部評価委員による「なんでも相談会」を開催するなど，学校や学校以外の「生」の職場で働く職業人としての先輩と，直接に交流する機会を意図的，計画的に設ける必要性が提案された。

【項目Ⅳ：学生の育ちについて】

本学部では「教師力」を３つの分野からとらえ，それぞれを次のように意味づけています。

① 教育実践力：学習者を理解し，身につけた知識や技能で教育を実践する力
② 対人関係力：相手や目的に応じてコミュニケーションを行う力
③ 自己深化力：必要な情報をさまざまな方法で探したり発信したりして，自己の知識や能力を深める力

設問Ⅳ　本日の面接道場や，受け入れていただいている体験学修等における学生の様子をご覧になられ，社会に巣立つまであと１年となった学生の育ちに関する印象を，上に示した３つの分野を参考にされながらお聞かせください。

【結果】

いただいた意見を，成長している点と課題，期待の３点にわけてまとめると，次のようになった。特に課題や期待に述べられた言葉は委員のみなさまから学生に対するエールである。

成長している点

○自分をみつめている学生が増えてきたという印象がある。
○実習や体験をとおして，児童生徒との関わりの中から多くのことを身につけてきている。
○礼儀正しく素直で，好感がもてる。
○今の自分の実態を受け止め，課題をもち，前向きに取り組んでいこうとする姿がある。

課題と考える点

○教育実践力と対人関係力を高めるために支えているものが自己深化力だと考えているが，この下支えする自己深化力がまだ十分とはいえないのではないか。興味関心をもち主体的に学び，教育と関連づけながら，自己の価値観や感性を高めていく努力が必要だと感じている。
○個々の学生によって，対人関係力に差が大きいのではないか。
○もう少し幅広く考えられるよう，さまざまな体験を積むことが大切である。やや自分中心になっているのではないか。
○面接道場では，やはりマニュアルどおりの答えが多かったように思う。教員以外に就職を希望する者は，自分が教育学部で何を学んできたか，そして，その体験が希望する職種にどのように生かしていくことができるかを，自分の言葉で語ることができるようにしたい。
○自分のことをわかってもらえるように説明する力が，まだついていない。常日頃から思考する習慣を。
○やや結果（成果）を気にしすぎる傾向がある。現場（現実）に直接ふれる中から多くのこと

を学ぶのだから，思い切って自分らしさを大切にしてぶつかることを忘れないでほしい。本気でぶつかり失敗をし，反省する中で確かな力が育っていく。

期待したい点

○教職に向けての確かな「志」づくりを期待する。
○さらに学んで，「頼もしさ」が伝わるように願っている。
○自分の夢の実現に向け，体力，気力，覇気を大切に。

【項目Ⅴ：教員志望状況や入学希望者動向について】
＜教員志望状況について＞
設問Ⅴ－１　平成26年度及び27年度の教員採用試験受験率について，率直な感想をお聞かせください。
平成26年度：卒業者155名　うち教員採用試験を受験した者127名　受験率81.9%
平成27年度：卒業予定者166名 うち教員採用試験を受験した者121名　受験率72.9%
１．かなり多いと思った　２．多いと思った
３．どちらともいえない　４．少ないと思った
５．かなり少ないと思った

設問Ⅴ－２　平成26年度及び27年度の教職就職率について，率直な感想をお知らせ下さい。
平成26年度：教師の道へ進んだ者101名（非常勤講師等も含む）　教員就職率65.2%
平成27年度：（最終数値未定）
１．かなり多いと思った　２．多いと思った
３．どちらともいえない　４．少ないと思った
５．かなり少ないと思った

【結果】集計結果（下図３参照）
14名の委員のうち，４割程度の方が多いと感じておられることがわかった。

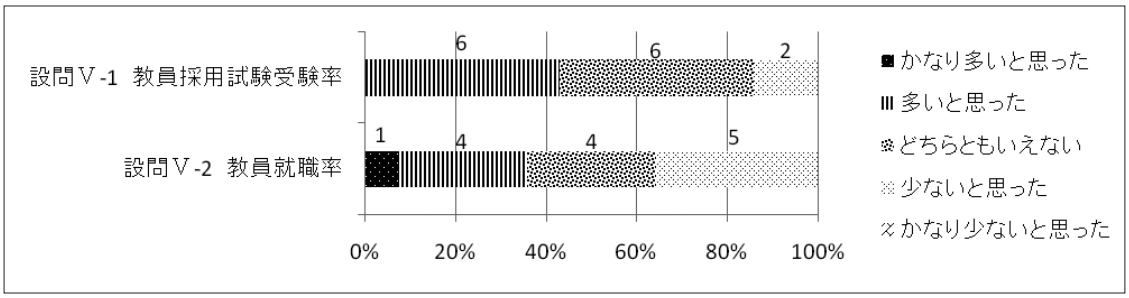

図３　設問Ⅴ－１，設問Ⅴ－２の集計結果

＜入学希望者動向について＞
設問Ⅴ－３　本学部への入学志願者を増やすためには，どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせ下さい。

【結果と考察】

10名の委員から，地域への情報発信と，それに見合うだけの学部教育活動をより一層推進していくことについて意見をいただいた。

地域に向けた情報発信・アピールを

情報発信に関しては，地域に対し，本学部の取り組みの具体や教員就職率といった数字を，より積極的に伝えていくという意見が多かったが，伝える内容には，教職自体の魅力だとする意見もあった。後者については，本学部だけでなく，学校現場を巻き込んだ取り組みが必要ではないかという意見も寄せられた。具体的には，次のとおりである。

○卒業生の進路や教職就職率のデータを全面に押し出していく最もストレートで正攻法な方策がよい。数字は嘘をつかないし説得力がある。

○島根大学教育学部に入学すれば教員になれる割合が高いということを，高校生や中学生にアピールしていく。そのためには，教員採用試験受験率や教員就職率を今以上に上げていくこと。

○学校現場や地域と連携した他大学にはない取り組みは，全国的にみてもすばらしく特徴的である。この点をもっと発信していく。

○人間を教育する教員養成の学部なので，学生が自らを問い直し将来に必要な力を磨く学部教育を行うことをとおして，人づくりを大切にしていることもアピールしていく。

○「島大教育学部は楽しくて面白いところだ。教師をめざす熱い学生が集まっている」ことを示すさまざまな活動を，ニュース等の報道を通じて伝えていく。

○学校が魅力ある職場になることと，教職の魅力を現場からも発信していく。

魅力ある学部教育の取り組みを

地域に発信・アピールしていくためには，それに値する学部教育活動を展開していくことが必要である。そのためのヒントになる提案をいただいた。

○一朝一夕には難しいが，幼稚園や学校へすばらしい教員をより多く送り出すことが，一番の魅力につながる。

○島大の学生なら，教員としても社会人としても安心と思われる学生を育てていく。

○現場の教師には学部教員が関わる機会がもっとほしい。学部教員が幼稚園や学校で授業をしたり，学生が授業補助をしたり，学生が高校生と意見交換をする機会をつくって，島大や教育学部の存在を身近なものにしていく。

また，これらとは別に，入学志願者を増やすのはいいことだが，教員志望者を増やすことがもっと大切ではないかという意見をいただいた。加えて，さまざまな課題を抱える学校現場とすれば，入学志願者を増やすより諸課題に対応できる「能力」がある学生を集め，教員養成の中で磨き上げてほしいという願いが語られていた。

【項目Ⅵ：その他，学部に対するご意見やご要望など】

これまでにご回答いただきましたⅠ～Ⅴ以外の事項につきまして，学部に期待することも含め，ご意見やご感想がありましたら以下に自由にご記入ください。

【ご意見・ご感想】

○現在の教育課題の一つに学力向上があるが，これに対し，県教育委員会と連携しながら，島大の先生方がもっと学校現場に出かけて指導していただくとよい。

○教職をめざす学生たちは，社会の動きを知り，それを咀嚼して子どもたちに伝えられる能力を身につけてほしいと願っている。「今日のこの出来事から，こんなことを教えたい……」といった社会に敏感な学生が育つ教育をより積極的に行ってほしい。

○地域とつながり，幼・小・中・高・特支といった園・学校からの要請に応えることができる体制を設けるべきである。

たとえば，・園・学校からの教育に関する相談が気軽にできる体制
・市町村教委からの指導要請に応える体制
・発表された教育研究論文を自由に閲覧できる体制とPR
・県教委，市町村教委，園・学校現場の代表者と定期的に情報交換する機会の設置

これらのことをとおして，要は，島大教育学部の先生方の専門分野をもっと広く公開(PR)し，誰にどんなことを相談できるかわかるようになってほしい。

○学生と学校等の現場との関わりは，双方にとってとても喜ばしいことである。さらに充実したものになるよう期待している。

○一人一人の学生を大切に育てようとする取り組みや先生方の熱意に圧倒された。現場で島大教育学部との教員養成に係る連携を操ることが，これからの教育の新しい一歩になる気がする。

○島大教育学部の果たしてきた役割は大変大きい。各地に優秀な教員を数多く輩出してきていると思う。また，「1000時間体験学修」など独自のチャレンジも行っておられ，地域社会と一つになり取り組まれている。今後もさらに，時代の変化，地域の要請に応えていけるよう常に新しいことにチャレンジしていってほしい。

○今，教育現場は加速的に環境（児童生徒，保護者，地域，時代，教育そのものの方向等）が変化している。そんな中で，「立派な先生」と言われていた教師の中に指導法や先の環境の変化についていけず，精神的ダメージを受け，休職や退職する人が増えている。このような状況の現場に立ち向かう学生なので，一生かけて勤めて（務めて）いくための「長いスタンスでのめざす教師像」がもてる学生を育てていただきたいと期待する。

○学部新卒者との出会いの中で感じることは「出身大学による資質の差は少ない」ということ。個々のセンスによるところが大きいと思われるが，そのセンスを磨いてほしいし，島根大学は地元の大学なので，地元を愛し地元で働くことに誇りをもてる学生を一人でも多く輩出していただきたい。

Ⅲ　まとめ

Ⅰ章にも述べたが，今期（第六期）の「学部教育活動評価委員会」は，新たな外部評価制度への架橋的時期であり，十全な外部評価へ向けた機会や時間の確保ができなかった。そのような現状があったにも関わらず，委員の皆様方には極めて内容豊かな，多岐にわたる建設的な意

見をいただいた。心から感謝するとともに，近々に予定される学部改組に向けて，この成果を積極的に活用したい。平成27年12月の「山陰教師教育コンソーシアム」の設立によって，島根大学教育学部の「学部教育活動評価委員会」は，来年度以降，新たな枠組みで再出発することになる。具体的には，山陰両県の，教育行政分野，学校教育分野，社会教育分野，芸術文化NPO分野，企業・報道機関から計10名程度で組織され，任期２年のなかで様々な学部教育活動に参画していただきながら外部評価を依頼することになる。

教員養成に特化した平成16年度以降，島根大学教育学部の外部評価機関として，これまでの六期12年にわたる多くの委員の方々のご尽力に今一度深く感謝し，本稿を閉じる。

参考文献

１）教員養成GP報告書「戦略的FDによる資質向上スパイラルの実現」（平成19年３月　島根大学教育学部）

２）「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第五期（平成24年・25年度）の評価票から－」
島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.13』　原　広治・塚田真也・畑　智子・河添達也（平成26年７月）